

## 映像メディアと児童の受容態度の分析(3)

— 成人との比較において —

研究第8部 星 美智子・湯川 礼子  
研究第7部 高橋 種昭・須永 進  
嘱託研究員 大内 茂男 (江戸川大学)  
岡田 陽 (玉川大学)  
仲佐 秀雄 (日本民間放送連盟)  
山本 保 (厚生省児童家庭局育成課)

### 要約:

本研究の目的は、児童の健全育成と世代間の交流の面から、成人との比較において児童の映像メディアの受け内容および受け反応を分析することにある。方法としては、世代の違いにかかわらず視聴できるビデオを提示して反応を分析する(ドキュメンタリー「アフリカぞうの親子」、非日常的アニメーション「日本昔ばなし・かさじぞう」、日常的アニメーション「サザエさん」の三種)。被験者にビデオ視聴させ、G. S. R. (galvanic skin reflex)を測定する一方、被験者の表情・身体反応をビデオで撮影記録する。他に、日常のテレビ視聴のアンケート調査を行う。対象は小学2年、小学5年、中学2年、大学1年、4年(各学年男女5名ずつ)、母親30代10名および60代男女5名ずつである。結果として1) G.S.R.の振幅数は大学生までは年齢が低いほど多く、大学生以上は年齢差がみられない。つまり、年齢の低いものは場面場面に反応している。2) 反応の合致場面からみると、年齢の近いものの合致率高く、興味や関心の類似を示している。3) 表情観察では、年齢の隔りなく楽しんで視聴しているが、笑いは大学生以上に顕著にみられ、ゆとりある視聴態度が観察された。

見出し語: ビデオ視聴, G.S.R. 表情観察, 世代間交流

## Analyses of Video Media and Children's Receptive Attitude (3) —In Comparison with Adults'—

Michiko HOSHI, Taneaki TAKAHASHI  
Reiko YUKAWA, Susumu SUNAGA  
Shigeo OUCHI, Akira OKADA  
Hideo NAKASA, Tamotsu YAMAMOTO

The purpose of the present study is to analyze children's receptive substance of video media and receptive reactions to them in comparison with those of adult people from the sides of sound growth of children and of generation interchange. As the method, the videos that can be watched irrespective of generation were presented and analyzed. (3 kinds of videos: Documentary - "Parent and Child of African Elephant", fictitious animation - "Japanese Old Story Kasa Jizo" and daily life animation - "Sazae-san"). All the subjects were asked to watch these videos and their G.S.R. (Galvanic Skin Reflex) were measured. On the other hand, the expressions and physical reactions of the subjects were video tape recorded. The subjects were the second and fifth graders of elementary school, the second graders of junior high school, the freshmen and the seniors of university (5 boys and 5 girls in each grader), 10 mothers in their thirties, and 5 men and 5 women in their sixties.

Key Words: Video watching. G.S.R. Observation of expressions. Generation interchange.

## はじめに

われわれ児童文化財研究部会では、1976年から15年にわたり、観劇反応、音楽、学校劇、テレビ、身体表現活動、劇遊び、ビデオ制作、そして映像メディアの受容などをテーマに研究をすすめてきた。あえて、絵本や図書を取りあげなかったのは、これらは文字文化として長い歴史をもち、社会的承認と評価を得ているからである。一般に、文字文化は高度であり他の視聴覚的メディアによる文化は低俗ととらえられがちである。これは文字を習得するために多くの努力を費やしてきたこと（とくに日本語の漢字）による錯覚ともいえよう。文字メディアと映像メディアとは、メディアのそれぞれのもつ特質による違いはあるが、質の高低や難易のレベルの差ではないのである（内容の低俗さはメディアそのものの質ではない）。

文字メディアは、情報を系統的にひとつずつ処理していくが、一方、映像メディアは平行的処理、つまり、多くの情報の断片を同時に処理していくことになる。また、映像メディアは、見れば解ると思われがちであるが、映像は実物ではなく表現されたものである。したがって、映像の表現の約束ごと（表示記号）、文字メディアで言う文法がある。たとえば、ロングショット、クローズアップ、スローモーションなど数々の表示記号がある。したがって、映像メディアの理解には映像をよみとる能力が必要である。映像メディアのよみ能力は、成熟、一般的な経験、そして映像視聴経験によって発達する。今回われわれは、映像メディア受容の発達と年齢的特徴の分析を研究のテーマとすることとした。

## I 目的

映像メディアは、成人と児童とが同時に同一のものを視聴でき、家庭でのテレビやビデオ視聴は、家族成員の共通体験の場、コミュニケーションの場を拡大してきた。だが一方では、テレビが日常生活に確実に定着し、家族の成員が占有テレビを持つほど普及した現代、むしろ、テレビは個人との結びつきを強め、家族間の対話の欠如や世代間の断絶をもたらすようにもなっている。このような対峙する二つの方向のなかで、テレビ諸課題の解明の一つとして、児童の健全育成のために、世代間交流の観点から映像メディアの受容の分析を行うことが本研究の目的である。

## II 方法

## 1. 手続き

## 1) 提示刺激ビデオ

選択のプロセスと内容の詳細は、昨年度紀要第25集にゆずる。

## a ドキュメンタリー「アフリカ象」

大映株式会社映像事業部制作「おかあさんだーいすき」シリーズ全10巻の1巻である。アフリカ象の母と子の動きを追っている映像で、ナレーションがなく練習曲風のピアノがBGMとして流れている。全30分を11分37秒に編集した。

## b アニメ「日本昔噺、かさじぞう」

大陸書房「ビデオえほん館・日本おとぎばなし」の1巻「かさじぞう」。所要時間は適切なのでカットせずそのまま使用する。12分31秒。

## c アニメ「サザエさん」—カツオの決断力—

フジテレビ放映の「サザエさんシリーズ」から選択した「カツオの決断力」、前後にテーマソングをつなげて編集した。9分57秒。

## 2) 実験場面の設定

(1) 被験者をひな段3列に筆記台付椅子を並べてかけさせ、観察記録用ビデオカメラで全員の表情や身体の動きを撮影できるようにして刺激ビデオを視聴させる。被験者の後方にテレビ受像機1台設置して、前方の視聴させるビデオと連結して同時に画像を流す（観察記録用カメラで被験者の反応とテレビ画像を照合するためである）。観察記録用ビデオカメラは、オートマチック操作にして被験者に気づかれないようにする。

(2) GSRは5人合成抵抗を2台設置して、男子・女子別に測定する。年齢別に10名ずつ実験する。

実験の場面設定およびGSRの着装については紀要第24集を参照されたい。

## (3) 日常のテレビ接触状況調査

被験者を対象に、家族、テレビ所有台数、テレビ設置場所、大体いつもきまってる番組（各曜日ごとに一日5個以内の番組名）、一緒に視聴する家族などの項目についてアンケート調査をおこなった。

## 2. 対象

玉川学園小学部、中学部、母親（30歳代）、玉川大学学生および60歳代の成人である（表1）。

## 3. 場所および日時

実験場所：玉川大学文学部芸術学科表現教育演習室  
実験日時：1989年5月20日・1990年6月23日

表1 被験者

	小2	小5	中2	大1	大4	30歳代	60歳代
男	6	6	6	6	5	/	6
女	6	6	6	6	6	12	6
計	12	12	12	12	11	12	12

※ G.S.R.測定は男・女5名ずつ、  
母親10名 計83名



写真1. 電極板の着装 — 大学1年 —



写真2. 実験場面 — 60歳代 —

### III 結果

#### 1. G.S.R. 反応

G.S.R. 抵抗値測定については、一昨年度、昨年度の  
研究報告に記した通りである。そして、抵抗値の変動は、  
小学2年、5年、中学2年、成人と年齢が高くなるほど、  
持続時間がながくなり、振幅数が少なくなる傾向をみる  
ことができた。今年度は、大学1年、大学4年と60代男  
女を加えて提示刺激別に反応をみることにした。

##### 1) 提示刺激別反応 (年齢別)

刺激別の反応を比較するため、提示刺激の時間がそれ  
ぞれ異なるので各刺激1分間の反応を算出して検討するこ  
ととした。表2は反応総数と1分間の平均反応数を示し  
たものである。なお、大学は1年と4年の平均値である。

表2 1分間の反応回数 (反応総数)

	アフリカ象	かさじぞう	サザエさん
小2	11.5 (134)	8.2 (103)	9.3 (93)
小5	5.8 (67)	8.9 (112)	8.8 (88)
中2	4.9 (57)	6.6 (83)	6.5 (65)
大学	4.0 (47)	4.2 (53)	5.9 (60)
30歳代	4.1 (48)	2.3 (29)	4.9 (49)
60歳代	4.9 (57)	4.3 (54)	4.5 (45)

##### a アフリカ象

他の刺激「かさじぞう」「サザエさん」も小学生は他  
の世代よりも反応が多くなっているが、「アフリカ象」で  
は小学2年の反応数がとくに多いのが目立っている。小  
学2年の1分間の反応数11.5は小学5年5.8の約2倍  
である。中学2年と60歳代は小学生より少く4.9であり、  
さらに大学(4.0)、30歳代(4.1)は中学・60歳代より  
反応数が少なくなっている。

##### b かさじぞう

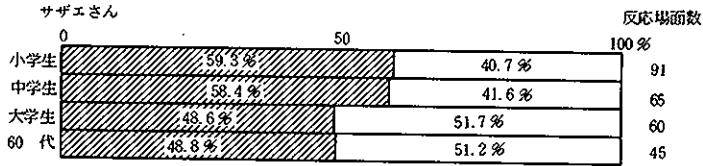
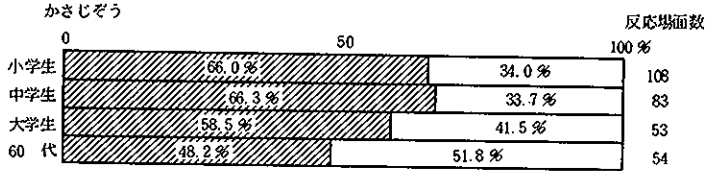
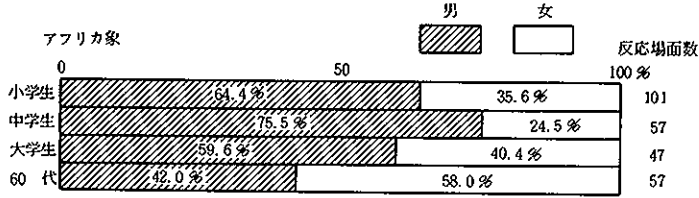
「かさじぞう」は、1分間の反応数で中学2年(6.6)、  
小学5年(8.9)、小学2年(8.2)であり、大学生以上  
(大学4.2、30歳代2.3、60歳代4.3)の群より小・中  
学生群の反応数の多いのが明らかである。とくに、他の  
刺激a「アフリカ象」、c「サザエさん」と比較して特徴  
的なのは小学5年生の反応数が小学2年生の反応数より  
多い点である。

##### c サザエさん

「サザエさん」の反応数をみると、小学2年生は1分  
間9.3であり、小学5年、中学2年、大学、30歳代、60  
歳代と順次に減少して、60歳代は小学2年生の反応数の  
50%弱で1分間4.5である。

#### 2) 提示刺激別反応 (男女別)

つぎに、30歳代(母親)を除き他の世代の反応を刺激  
別・男女別にみている。男女計の反応数を100として男  
女の比率をみたのが図1に示すものである。男・女の割  
合では、小学2年と5年はほぼ類似しているの、小学  
2年と5年を合わせて小学生とした。なお、小学生2年  
・5年でN20、おなじく大学生1年・4年でN20であり、  
他群(中学N10、60歳代N10)と比較しやすいように、  
小学生・大学生は1分間反応場面数を1/2として記した。



a 「アフリカ象」では小学生、中学生、大学生が女子より男子の反応が多く、女子約25%~40%に対し、男子は約60%~75%である。とくに、中学生の男女差が大きく、ついで小学生、大学生である。60歳代は男子と女子の割合は逆になり男子42%に対し女子58%の割合になる。

b 「かさじぞう」で男女差をみると、小学生・中学生は男子が66%と女子が34%で、ほぼ内じ割合を示しており、大学生は男子約60%、女子40%で、いずれも男子が女子より多くなっている。60歳代は、男・女が逆になり、男子48%、女子52%である。

c 「サザエさん」では、小・中学生と大学生・60歳代の二つの傾向にはっきりわかれている。すなわち、小・中学生は、男子が60%弱、女子が40%強で男子の反応が多く、大学生と60歳代は、男子が49%弱、女子が51%強の割合で女子の方が多くなっている。全体でみると、小学生・中学生は三刺激ともに男子の反応が女子より多く、60歳代は各刺激とも男子より女子の反応が多い。大学生では、「アフリカ象」「かさじぞう」は男子の割合が多いが「サザエさん」だけは男子より女子の反応が多くなっている。

3) 各世代相互の合致率

a アフリカ象

各世代間の反応場面の合致率をみると、小学2年と中学2年が25.0%と¼の合致を示し、小学2年と小学5

年、小学5年と中学2年はそれぞれ18.0%である。大学生は1年、4年ともに30歳代とは10%強の合致を示すが、小・中学生および60歳代とは10%に満たない合致率である。30歳代は各群との合致率が他の世代に比べておしなべて高く、大学1年との合致10.5%から小学2年との合致19.5%という合致を示している。60歳代は30歳代との合致率は11.5%であるが他の世代間とは4.1%~9.1%である(表3-1)。

表3-1 反応合致率(アフリカ象) ( )反応場面数

	小 2	小 5	中 2	大 1	大 4	30歳代
小 5	18.7% (139)	/				
中 2	25.0% (128)	18.0 ( 89)	/			
大 1	7.2% (139)	4.4 ( 91)	4.7 ( 85)	/		
大 4	9.2% (141)	7.5 ( 93)	8.1 ( 86)	7.5 ( 80)	/	
30歳代	19.5% (128)	13.8 ( 87)	13.3 ( 83)	10.5 ( 76)	10.8 ( 83)	/
60歳代	6.7% (147)	9.1 ( 99)	4.1 ( 98)	8.3 ( 84)	5.3 ( 94)	11.5 ( 87)

表3-2 反応合致率(かさじぞう) ( )反応場面数

	小2	小5	中2	大1	大4	30歳代
小5	39.8% (128)	/				
中2	25.8% (128)	31.7% (123)	/			
大1	10.1% (119)	9.1% (121)	5.6% (108)	/		
大4	8.2% (134)	7.4% (136)	9.6% (104)	7.7% (91)	/	
30歳代	15.0% (100)	14.9% (101)	11.4% (88)	6.3% (64)	5.1% (78)	/
60歳代	6.1% (131)	8.5% (129)	4.3% (117)	3.4% (89)	7.1% (99)	2.7% (74)

表3-3 反応合致率(サザエさん) ( )反応場面数

	小2	小5	中2	大1	大4	30歳代
小5	29.1% (103)	/				
中2	26.5% (98)	23.0% (100)	/			
大1	7.3% (109)	7.6% (105)	8.7% (92)	/		
大4	9.3% (118)	4.2% (120)	3.7% (108)	9.7% (93)	/	
30歳代	18.4% (98)	13.8% (94)	11.2% (89)	8.5% (82)	8.6% (93)	/
60歳代	7.5% (106)	6.8% (103)	9.0% (89)	6.1% (82)	8.8% (91)	11.7% (77)

b かさじぞう

「かさじぞう」の反応場面の合致は、小学2年と5年は39.8%と高い率である。小学5年と中学2年が31.7%、小学2年と中学2年が25.8%とこれらもかなりの高率といえる。つまり、小学2年と小学5年は全反応場面の4割、小学2年と中学2年は全反応の1/4以上が同じ場面に反応している。この小学2年、5年、中学2年は各刺激とも合致率が高いが、「アフリカ象」「サザエさん」と比較して「かさじぞう」がもっとも多く合致しているのが明らかである。大学1年・4年ともに他世代との合致率は小・中学生より低下する。大学1年と4年の間でも合致率は少ない。大学は一般に他の世代間との合致率は低いが、「アフリカ象」「サザエさん」に比較して小学生2・5年、中学生2年との合致率が高い結果となっている。30歳代は小学2年と15%の合致率で、小学5年、

中学、大学1年、4年、60歳代と年齢の高くなる順に合致率が低くなっている。60歳代は各世代との合致率は他の年齢層と比べてもっとも低く、他の提示刺激と比べても「かさじぞう」での合致率は低くなっている。とくに30歳代との合致率では他の二刺激で11.6%内外のものがここではわずかに2.7%にすぎない。

c サザエさん

「サザエさん」視聴の反応合致場面率は、小学2年、5年、中学2年の小・中学生間の合致率が他の世代間相互の合致より明らかに高くなっている。しかし「かさじぞう」の合致率にはおよばない。大学生は他の世代群に比べて各年齢層との合致率は低い。30歳代は、小学2年(18.4%)、5年(13.8%)、60歳代(11.7%)、中学2年(11.2%)、大学(8.5%)の順に合致率が低くなっている。しかし、30歳代は他の世代と比べて他群それぞれとの全体の合致率は高い。60歳代では、30歳代との合致がもっとも高く11.7%である。これは三刺激を通して、各年齢群別にみても60歳代の最高の合致率となっている。

全体的傾向

以上、各刺激別の年齢群の合致率をみてきたが、ここで全体的に世代間の合致傾向を知るために、三刺激をあわせて検討してみる。どの刺激でももっとも合致率の高い小学2年生と5年生の合致率を100として他群との合致率を指数で表示してみると次のようになる。なお、大学1年・4年は近似しているので両者の平均を大学生とした。

	小2年	小5年	中2年	大学生	30歳代	(指数)
小5年	100					
中2年	90	83				小2:小5=100
大学生	31	24	24			
30歳代	62	48	41	28		
60歳代	24	28	21	24	31	

ここで明らかなように、小学生2年と5年、中学生と小学生は反応の合致率が高く、他群間の合致の2倍から4倍にもおよんでいる。30歳母親は小・中学生と合致するものが多いが、大学生と60歳代は他群との合致が少ない。

4) 男・女の合致場面率

反応場面の男女合致した場面を両者の反応数からその割合を算出した。昨年度は小学生・中学生全体での男女合致をみたが、今回は各学年ごとに男女合致率を出し、大学・60歳代の男女合致率と比較した。aアフリカ象では、小学2年の合致率22.7%、ついで小学5年の19.6

表4 男女の合致場面

	アフリカ象			かさじぞう			サザエさん		
	反応場面数	合致場面数	合致率	反応場面数	合致場面数	合致率	反応場面数	合致場面数	合致率
小 2	110	25	22.7%	89	14	15.7%	72	17	23.6%
小 5	56	11	19.6	90	22	24.4	68	20	29.4
中 2	50	7	14.0	72	14	19.4	55	10	18.2
大 学	86	8	9.3	98	7	7.1	102	17	16.7
60歳代	52	5	9.6	50	4	8.0	42	3	7.1

%, 中学の14.0%となり、年齢が高くなるにつれ男女の一致が少なくなり、大学・60歳代は9.3%, 9.6%に減じている。bかさじぞうは、小学5年の男女一致率が一番多く24.4%, 次が中学2年19.4%, 小学2年15.7%である。大学は男女一致がもっとも少なく7.1%, 60歳も合致率低く8.0%である。cサザエさんの場合は、小学5年の男女合致率が29.4%, 小学2年が23.6%と小学生の男女合致が高い。中学生(18.2%)と大学生(16.7%)は、ほぼ似た傾向であるが、60歳代は7.1%で男女の合致の低いことを示している(表4)。全体でみると、男女合致は「サザエさん」がほぼ22%、「アフリカ象」と「かさじぞう」は、15%内外である。小・中学生は平均ほぼ21%の合致率であるが、大学・60歳代の平均は9.6%とかなりの開きがみられる。

5) 反応場面の分析

a 「アフリカ象」

「アフリカ象」のビデオは、象の母と子の動きを追う映像で、ことばもナレーションもなく、単純な練習曲風のピアノの音がBGMとして流されている。したがって、映像を「母象」「子象」「母象と子象」「タイトル」の4場面に分けて反応場面のちがいを検討した。表5-1にみられるように、小学2年生に圧倒的に反応数が多く次に多い小学5年生の2倍にもなっているが、場面別の分析

表5-1 アフリカ象(画像による反応場面数) %

	母象	子象	母象と子象	タイトル	計
	1分33秒	6分50秒	2分17秒	0分57秒	11分37秒
小 2	14.2	53.6	16.4	15.7	134(100.0)
小 5	26.9	41.8	14.9	16.4	67(100.0)
中 2	15.8	47.4	14.0	22.8	57(100.0)
大 学	20.9	52.1	6.8	20.2	47(100.0)
30歳代	18.8	50.0	8.3	22.9	48(100.0)
60歳代	10.5	50.9	19.3	19.3	57(100.0)

ではそれほど顕著な開きはみられないが、他世代群よりも「子象」場面への反応が多い。小学5年は「母象」場面への反応が他群に比べもっとも多くなっている。「母象と子象」の場面は60歳代が多く、大学や30歳代の倍以上である。タイトル(文字が画面に出る)の場面は中学・大学・30歳代が多く、小学生の反応は少ない。

b 「かさじぞう」

「かさじぞう」は音やことばから「会話」「ナレーション」「セリフの間」「BGM」「効果音」「タイトル他(エンディングなどを含む)」の6項目に分類して各世代別の反応を分析した(表5-2)。表に示されるように、「会話」の反応は小学5年の53.6%がもっとも多く、

表5-2 かさじぞう(音声による反応場面数) %

	会話	ナレーション	台詞の間	BGM	効果音	タイトル他	計
	7分09秒	1分43秒	0分51秒	0分30秒	0分37秒	1分41秒	12分31秒
小 2	44.7	13.6	10.7	0.9	8.7	21.4	103(100.0)
小 5	53.6	13.4	6.3	1.7	4.5	20.5	112(100.0)
中 2	47.0	16.9	2.4	2.4	7.2	24.1	83(100.0)
大 学	22.6	17.0	24.5	3.8	5.7	26.4	53(100.0)
30歳代	44.8	17.3	6.9	0.0	10.3	20.7	29(100.0)
60歳代	40.7	13.0	16.7	5.5	3.7	20.4	54(100.0)

表5-3 サザエさん(音声による反応場面数) %

	会 話 6分16秒	台詞の間 0分26秒	チャイム 0分06秒	タイトル 他 3分09秒	計 9分57秒
小 2	62.4	4.3	2.2	31.1	93(100.0)
小 5	61.4	2.3	3.4	32.9	88(100.0)
中 2	60.0	6.2	3.1	30.7	65(100.0)
大 学	45.0	15.0	0.0	40.0	60(100.0)
30歳代	38.8	10.2	0.0	51.0	49(100.0)
60歳代	44.5	13.3	0.0	42.2	45(100.0)

次に中学2年生47.0%であり、小学2年、30歳代は45%弱である。大学生は22.6%ともっとも少ない。「ナレーション」への反応は、中学2年、大学、30歳代が17%内外であるのに対し、小学2、5年と60歳代は13%強である。「セリフの間」は大学生が他群に比し24.5%と多くなっている。「タイトル他」の反応は大学26%、中学24%であり、他は20%強である。

c 「サザエさん」

① 音声による反応場面の分析

「サザエさん」は音声によって「会話」「セリフの間」「チャイム」「タイトル他(テーマソング・エンディング)」の4項目別に反応をみた。「会話」への反応は、小学2年62.4%、小学5年61.4%、中学2年60.0%と小・中学生が60%台で多く、他世代は45%以下である。「セリフの間」は逆に小・中学生が少く平均4.3%に対し大学以上は12.8%と3倍以上である。とくに大学生が一番多く15%を占める。「チャイム」は学校内で鳴るが、小・中学生だけに反応がみられ、大学以上の世代には反応がみられない。「タイトル他」は、小・中学生の平均31.5%に対し大学・30歳・60歳代の平均44.4%とその開きがみられる。

② 登場人物による反応分析

つぎに、登場人物別に反応を分析した。世代群別、男女別に検討したが、男女別にはそれほど差がないので、ここでは世代群別をとりあげた。小学2年、5年と中学生は似た傾向を示し、大学・30歳・60歳代が類似しているので、大きく二群に分けて比較することとする。登場人物の反応の多い順に5位までをとりあげると次のようになる。

- 小・中学生 ①カツオ(65)、②波平(26)、③サザエ(16)、  
④花沢(16)、⑤先生(7)  
大学～60歳 ①カツオ(34)、②波平(28)、③花沢(9)、  
④舟(4)、④中島(4)

ここでみるように、1位カツオ、2位波平は両群とも

変らない。刺激ビデオはサザエさんシリーズの「カツオの決断力」をとりあげたものなので、カツオと父親の波平の登場場面が多く、上位を占めている。3位「花沢」はカツオのクラスの嫌われものの女の子である。小中学生の3位「サザエ」はストーリー上の重要場面で登場少ないので大学以上の反応は少ない。「中島」はカツオのクラスの男子でカツオをからかう場面で登場し、中学生と大学生に反応がみられる。「先生」は「誰か掃除当番をかわれるものはないか」というセリフだけの一場面であり、小・中学生では5位であるが、大学以上の反応はまったくない。

2. ビデオによる表情観察

被験者のビデオ視聴時の表情や身体の動きをビデオカメラで撮影記録したものを分析する。G.S.R. 測定のため右手は電極板をつけて筆記台の上におき、身体を動かさないよう指示されているので、全体に姿勢や動作に大きな変化はみられない。ここでは、「笑い」の反応について、刺激ビデオでもっとも反応の多い「サザエさん」について分析することとした。「笑い」には、「ゲラゲラ笑う」「高笑い」、「しのび笑い」「ふき出す」「にっこり笑う」など種々あるが、笑い方の個人個人の差もあり、「笑い」をいくつかにわけてウェイトをかけることは無理があるので一律にとらえることとした。

提示刺激ビデオのこぼや音を経過時間(開始からの分、秒)に合わせて記入した記録表を作製し、被験者ひとりひとりごとに記録ビデオをみて「笑い」の反応を記入していくこととした。その結果を世代別、男女別に反応数の集計をしたものが表6である。大学は1年と4年

表6 表情観察—笑い— サザエさん

	小2	小5	中2	大学生	30歳代	60歳代
男	16	6	21	181	88	88
女	6	51	15	242	414	180
計	22	57	36	423	414	268

を合計した反応(20名)なので、他世代の10名と比較するため、1/2の反応数を示した。ここでみるように、小学2年、5年、中学生の笑いの反応は大学生・30歳・60歳代に比較してきわめて少いことが明らかである。G.S.R.の反応では、年齢が低いほど多く、小学2年が60歳代の2倍である(表2)のに対して、笑いの反応は小学2年がもっとも少く(22)、もっとも反応の多い大学生(423)の20分の1強という大差を示している。男女別にみると、小学2年は男子が多く、小学5年は逆に女子が多く、中

学2年は小学生ほどの差ではないが男子が多くなっており一概にどちらが多いともいえないが、大学・60歳代は男子より女子の方が多く、60歳ではとくにその傾向が大である。

表7 音声による場面別の笑い ( )%

	会 話	台詞の間	チャイム	タイトル他
小 2	13 (1.6)	0 (0.0)	2 (66.7)	7 (1.9)
小 5	29 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (7.2)
中 2	20 (2.5)	1 (6.7)	0 (0.0)	15 (3.9)
大 学	252 (30.9)	3 (20.0)	0 (0.0)	168 (43.3)
30歳代	283 (34.7)	11 (73.3)	0 (0.0)	120 (31.0)
60歳代	218 (26.7)	0 (0.0)	1 (33.3)	49 (12.7)
計	815 (100.0)	15 (100.0)	3 (100.0)	387 (100.0)

笑いの反応を音声による場面別にみると(表7)、「会話」場面では、30歳代(約35%)、大学生(31%)が多く、次に60歳代(27%)であり、小・中学生では平均(2.6%)にすぎない。「台詞の間」の反応は圧倒的に30歳代が多く、大学生20%、中学生6.7%、他の世代は0である。「チャイム」は小学2年生67%弱と60歳代33%強に2分される。「タイトル他」は大学生がもっとも多く43.3%であり、次に30歳代31.0%、60歳代12.7%になっている。小・中学生は1.9%~7.2%できわめて少い。大学生・30歳代に多い「台詞の間」「タイトル他」の場面は、画像の流れのギャグであり、タイトルにはふきだし文字も出てくる。また、「会話」もこの世代に多いが早いテンポの会話で進行している。こうしたテンポの早い画像や会話、映像のギャグのよみとりは、小・中学生の反応が少いといえる。60歳代は小・中学生よりは大学・30歳代に近いが、大学・30歳代に比較して「会話」「セリフの間」「タイトル他」などの早いテンポ、映像ギャグの笑いが少いことが明らかである。

全体を通じて大学生・30歳代ついで60歳代に笑いが多く、映像のながれ、つぎの予測と続いて笑いがみられるのに対し、中学生以下は部分部分で笑いが途切れている。中学生以下にみられる笑い場面は、次にあげるような個所である。

おやつのカステラを前に  
 タラ「早くして下さい」  
 カツオ「こっちなー、それとも」(と選択に迷う)  
 マスオの発案でカツオがカステラを切り、自分が最後に残ったのをとることになる。つぎの日  
 カツオ「えー、ぼくが切ってもいいの」  
 ワカメとタラにさいそくされ  
 カツオ「うるさい、えーと正確に三等分……」  
 「だめだ、ぼくには切れない」

学校の授業開始のチャイムがなる場面  
 学校から帰ったカツオ  
 「くやしがるより追いかける方が先きだ」  
 (デパートに出かけたというサザエたちを追いかける)

波平のゴルフ、40人中35位、「参加することに意義がある」というのを受けて  
 カツオ「ぼくの学校の成績も参加することに意義がある  
 といいんだけどなあ……」

波平「将来、何になるにしても先ず勉強が必要なんだ」  
 カツオ「すぐ、こうなんだから」  
 など、自分たちの生活経験と結びついた個所で笑っている。

### 3. 日常のテレビ視聴

テレビ視聴については1985年に小・中学生を対象に、どうしても見たい番組、友だちと話すために見る番組、ためになった番組、楽しかった番組、いやな番組・嫌いな番組などを調査した。今回はビデオ視聴の被験者である大学生と60歳代の成人を対象にテレビ視聴番組のアンケート調査を行い被験者の視聴傾向をみることにした。

アンケートの内容は家族、テレビ台数、テレビの置いてある場所、大体いつもきまってみる番組(各曜日毎に一日5個以内、番組名、時間、一緒に見る人)である。

家族形態 大学生は23人中親、きょうだいと一緒に住んでいる核家族が10人(43.5%)、親、きょうだい、祖父母の三世代家族は3人(13%)、10人(43.5%)はひとり住まいである。60歳代は夫婦のみの世帯は12人中3人(25.0%)、夫婦と子どもの核家族2人(16.7%)、三世代家族は半数以上の7人(58.3%)で(夫婦・子ども夫婦と孫1人、夫婦と子ども、子ども夫婦と孫4人、夫なし子ども夫婦と孫2人)三世代家族が多い。

テレビ所有台数 所有台数は一人住まいの大学生は当然1台で、家族と住んでいる大学生や60歳代の家族は2~4台が多い。



視聴番組 アンケートに記入された番組名から表6に示した16のカテゴリーに分類した。このカテゴリーは先きに述べた「児童の生活とテレビに関する調査<sup>8)</sup>」と「現代児童の生活実態に関する研究<sup>14)</sup>」のテレビ視聴番組のカテゴリー化にならったものである。今回はドラマをホームドラマ・メロドラマ、サスペンス・刑事ものを、時代劇の三つに分け、回答の多かったトーク・対談番組とバラエティ番組を新たに追加した。

表8 テレビ視聴 カテゴリー別

カテゴリー	大学生		60歳代	
	男	女	男	女
1. ニュース・報道	6	15	13	23
2. ドキュメンタリー	1	4	2	3
3. 教育・知識	0	0	3	2
4. スポーツ	3	0	6	2
5. 趣味・教養	1	5	7	7
6. ドラマ・ホームドラマ・メロドラマ	6	14	4	10
7. " サスペンス・刑事もの	3	4	7	0
8. " 時代劇	5	1	12	6
9. 歌謡・音楽	0	2	2	2
10. トーク・対談	9	8	2	7
11. クイズ	3	6	2	4
12. バラエティ	15	4	1	0
13. お笑い・コミック	9	10	0	0
14. 日常的アニメ	5	3	0	7
15. 非日常的アニメ	5	0	1	0
16. 劇映画	4	4	0	0

大学生、60歳ともが一番多く視聴されていた番組はニュース・報道である。これは各放送局で毎日、しかも一日に何回も放映しているためと、国内外の事件やそれに伴う解説、政治、経済、スポーツ、気象などさまざまな情報が短時間で得られるからであろう。男女別にみると両年代とも男は女の半分以下（大学生男6女15、60代男13女23）であるがこれは60歳代の男は全員有職者であり視聴時間が女に比べて短いことと、午前8時半頃から始まる主婦向けの芸能ニュース、生活情報ニュースの番組を含めたためと考えられる。ニュース番組の中では朝はNHK、夜はニュースステーションが比較的多く視聴される傾向がみられた。

次いで多く視聴されているのはドラマの中のメロドラマ・ホームドラマで両年代とも女が多くなっている（大学生男6女14、60代男4女10）。これとは逆に時代劇は

両年代の男に好まれている（大学生男5女1、60代男12女6）。サスペンスは60代女はひとりも視聴していない。

この他大学生と60代で違いがみられたのは教育・知識番組で60代のみ（男3女2）が視聴し大学生は見っていない。大学生だけが見ているのはお笑い・コミック（男9女10）と劇映画（男4女4）である。バラエティ番組も大学生に好まれ（男15女4）60代は僅か1人である。旅行番組を含めた趣味・教養は60代（男7女7）が大学生（男1女5）に比べより多く視聴している。

今回追加したトーク・対談番組は大学生17人、60代9人が視聴していた。歌謡・音楽番組は前述の二つの調査では視聴者が多かったが、現在は歌番組の放映本数が減少し視聴者も少ない。

家族との同一視聴 家族がいる場合にどのような番組を誰と視聴しているかをみると、大学生が親と同一視聴している番組は朝と夜のニュース、クイズ番組、旅行を含む趣味・教養番組が多い。バラエティ番組も午後7時台は家族同時に視聴している。お笑い・コミックも日曜日の夕方時間帯は家族で視聴している。大学生がひとりで見ると見る番組はいま話題になっている「ちびまる子ちゃん」などのアニメや午後11時以降の番組、深夜のお笑い番組やお笑いの要素の強いトーク番組などである。

60代男の家族は6人中2人が夫婦のみ、1人は夫婦と子ども、3人は三世代家族である。三世代家族の1人を除く5人は共通してほとんどの番組を妻と一緒に視聴しておりひとりで見るとするのはスポーツ、趣味など僅かである。三世代のうち1人は他の5人とは全く異りどの番組もすべてひとりで見ると家族と一緒に視聴している番組はない。

60代女は夫婦のみが1人、夫婦と子ども1人、三世代家族4人（その中2人は夫なし）である。夫婦のみの方はニュース・報道は夫と視聴し、ドラマ・趣味はひとりで見ている。夫婦と子どもの人は夫婦のみの人と似かよっていてニュースは夫と、ドラマはひとりで見ている、成人した子どもとは朝の主婦向けの番組や日曜日の午前中に一緒に視聴している。三世代家族のうち夫のいない2人はひとりきりで見る事が多く、そのうちの1人は午後の対談「徹子の部屋」と「サザエさん」などのアニメ番組だけ家族と視聴している。三世代のもう1人は朝のニュース、朝の連続ドラマは夫・息子の妻、夕方のアニメは夫・息子の妻・孫と、日曜日午前中の音楽番組は息子も加わり家族全員で視聴しクイズや趣味はひとりで見ている。あと1人の三世代の方は朝のニュース、料理、「徹子の部屋」は娘と、アニメ、クイズは娘・孫と、夜のニュースステーションは娘夫婦と、日曜日の大河ドラマは

結婚していない娘と見ていてひとりで見るのはドキュメント、スポーツ、音楽である。この人は娘やその家族とは一緒に視聴しているが夫とは一緒に見ていない。この人の夫は60代男6人のうちの1人で、すべての番組をひとりで見ている人であり夫婦で被験者となった1組である。

#### IV 考 察

##### 1) G.S.Rの抵抗値変動

世代別にG.S.R抵抗値の変動をみると、全般に小学2年、5年、中学と年齢が高くなるにしたがい、変動が少なくなり、大学以上はそれほど差がみられない。これは、年齢の低いものは部分部分(場面転換や新しい登場対象など)への反応が多いのに対し、大学生以上は映像の文脈をよみとって反応している結果といえよう。

##### 2) 提示刺激別(映像の種類別)の比較

一昨年度<sup>11)</sup>の「原爆体験記」は小学高学年・中学生・母親を対象としたが、映像の内容が内容だけに全般に緊張・興奮が持続しており、男女差、世代差ともに僅少の差であった。「アフリカ象」は、のどかな母象と子象二頭だけの映像であり、解説のナレーションもなくピアノ曲が静かに流れるだけであるが、小学2年生は他の年齢群の倍ぐらいの反応がみられ、また他の「かさじぞう」「ササエさん」よりも反応多く、この映像が小学低学年に適していることが明らかである。なお、ついで5年生の反応が多いが、中学と60歳代は同じであり、大学・30歳代は反応少く映像の特徴をあらわしている。「かさじぞう」はゆったりした情緒的な映像とことば(会話・ナレーション)による日本昔ばなしのアニメである。小学5年にとくに反応が多いのは国語教材の影響であり、経験と映像メディアへの興味との関係を見ることができよう。小学2年・中学にもこの種の映像への親近感がみられ、小学・中学と大学・30歳・60歳の群の反応は1分間平均前者が7.8に対し後者は3.6と、小・中学生は倍以上の反応である。「ササエさん」は各世代に人気があり現在も週2回放映されているアニメーションで映像、ことばともに早いテンポで進行する。小学・中学生と年齢の低いほど反応数多く、「先生」「ササエさん」「カツオ」のアップの映像、学校の「チャイム」など断片的に反応している。タイトルやエンディングの個所の映像のギャグやふきだし文字の反応は大学生以上に反応がみられ、映像のよみ能力の差を見ることができよう。

##### 3) 世代間、男女の合致率

小学2年、5年、中学の三群は各刺激ともに合致率が

高く、つまり、同じ場面への反応が多く興味や理解の類似をみることができた。なお、30歳(母親)は子どもたちとも大学・60歳とも比較的合致率が高い。30歳代は家庭にいる小・中学生の母親であり、家族の誰彼をとわず一緒に視聴することが多いのであろう。NHKの生活時間調査でも、家庭の主婦の一日テレビ視聴時間は平均4時間25分で、他世代よりもっとも長時間になっている。大学生・60歳代はそれぞれ他群との合致率が低く世代ごとの特徴がみられた。男女の合致は、年齢の高い世代ほど合致率が低く男女差が年齢とともに大になるといえる。

##### 4) 笑いの表情観察

小・中学生は大学以上に比べて、同じ「ササエさん」の映像をみていると思えないほど笑いが少ない。小・中学生はG.S.Rでは反応が多いのに、笑うゆとりなくみているのがわかる。映像メディアの多数の情報を平行的に処理する特性からみて、真剣にとりこんでいるといえよう。60歳代とくに男性群もG.S.R反応の割に笑いが少ない。映像へのとりくみの努力と、社会習慣として感情を表に出さないためと考えられる。これに反し、大学生は終始ゲラゲラ笑いながらみえており、生れながらにテレビに接してきた映像メディア受容能力のゆとりを感じさせる。つまり、複雑な構成をよみとることができ、ストーリーを理解して次に何がおこるかの予測ができるからである。

##### 5) 日常のテレビ視聴

学生のひとり住いでも全員テレビを所有しており、家庭では2台～4台がもっとも多く、テレビ視聴が生活の一部となり、個人視聴の傾向が強くなっているといえる。大学・60歳ではともに「ニュース」が多く視聴され、芸能、スポーツ、生活情報、そしてキャスターの魅力など、最近のニュース番組の多様化を知ることができる。ドラマでは男子は「時代劇」「サスペンス」、女子は「メロドラマ・ホームドラマ」が多く、その差をあらわしている。家族揃って、あるいは他の世代の者と一緒に視聴するのは「アニメ」「お笑い・コミック」「クイズ」などである。10年前各世代に圧倒的人気のあった「歌謡、音楽」(ザ・ベストテン、夜のヒットスタジオなど)はみられず、ここにテレビ番組の変遷を見ることができよう。

#### むすび

本研究では、成人との比較において児童の映像受容と受け反応を分析してきた。児童のテレビやビデオ製作には、ここで明らかになった児童の映像メディア受容の能力や興味の特性を考慮する必要がある。また、ここで世代による映像メディアの受容の特徴やその違いをみて

きたが、文字メディアでは、このような児童から60歳代の年齢差をこえた同一接触は不可能である。この点、映像メディアは、世代間交流のための利用が可能であり、世代間交流を目的として、積極的に新しいテレビやビデオ製作がのぞまれるのである。

本研究に際しては、玉川大学文学部助教授、方勝氏に実験諸設備の調整や被験者の手配など多大な協力をいただき、結果の集計では段木委子さんの協力をえました。ここに深く感謝の意を表します。また、被験者として協力いただいた玉川大学小学部、中学部、大学の皆さん、お母さん方、そして60歳代の方々に厚く御礼を申し上げます。

なお、本研究は、一部、財団法人放送文化基金の助成・援助を受けて行いました。ここに深謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 「精神発達と文化財・児童文化財年間動向」 日本総合愛育研究所紀要 第12集 1976
- 2) 「1976年度児童文化財研究文献の総合化と体系的解析」 同上 第13～17集 1977～1981
- 3) 「中児審推薦図書目録の活用状況の調査」 同上 第13集 1977
- 4) 「児童の観劇反応に関する研究」(1)(2) 同上 第13、14集 1977, 1978
- 5) 「児童館における文化財利用の活動状況に関する研究」 同上 第15集 1979
- 6) 「子どもの音楽接触に関する実態調査」 同上 第16集 1980
- 7) 「小学校の学校劇に関する実態調査」 同上 第18集 1982
- 8) 「児童の生活とテレビに関する調査および四か国テレビ青少年番組調査の紹介」 同上 第21集 1985
- 9) 「表現活動と映像文化財に関する研究」—ムーブメントと劇あそびのビデオソフトの開発— 同上 第22集 1986
- 10) 「表現活動と映像文化財に関する研究」—制作ビデオソフトの活用と効果— 同上 第23集 1987
- 11) 「映像メディアと児童の受容態度の分析」—成人との比較において— (1)(2) 同上 第24, 25集 1988 1989
- 12) 星美智子「映像によるコミュニケーションの研究」—映像の表現法による比較— 同上 第2集 1966
- 13) 星美智子「幼児のテレビ視聴に関する研究」 同上 第4集 1968
- 14) 「現代児童の生活実態に関する研究」 同上 第24集 1988
- 15) NHK 世論調査部「日本人の生活時間 1985」日本放送出版協会 昭和61年